

## プロゾーン判定を利用した CRP 異常反応の検出

◎呉 詩星<sup>1)</sup>、鈴木 晴媛<sup>1)</sup>、藤村 哲士<sup>1)</sup>、山本 朱莉<sup>1)</sup>、宇佐美 陽子<sup>1)</sup>、石嶺 南生<sup>1)</sup>  
信州大学医学部附属病院 臨床検査部<sup>1)</sup>

【はじめに】日本電子 BM シリーズにはリアルタイムに異常反応を検出する仕組みとして「分散異常設定」や「プロゾーン判定」などの反応タイムコースチェック機能がある。前者は演算ポイントで測定された吸光度のばらつきを算出し、その値が設定した閾値よりも大きい時、異常反応であると通知される。後者は任意の反応過程区間における吸光度変化量が正常検体と異常検体では異なることを利用し、プロゾーンやその他の異常反応を検出する機能である。我々の施設では CRP 測定において分散異常のみ設定していたが、それだけでは異常反応を検出できなかった症例を経験し、その症例をもとにプロゾーン判定を組み合わせることで、分散異常では検出できない異常反応を検出できたので報告する。【症例】71 歳男性。食道癌の術後経過観察目的で定期的に外来受診していた。20XX 年 5 月 31 日の CRP は 13.08 mg/dL で分散異常と警告された。希釈直線性は不良、添加回収試験でも回収率が低く、別メーカーの試薬では < 0.10 mg/dL となったことから、非特異反応による偽高値が疑われた。-36 病日の測定値は 13.17 mg/dL だっ

たが、反応過程を見直したところ、こちらも非特異反応が疑われる反応過程であったが、分散異常の警告は発せられていなかった。【目的】反応過程の異常を見逃さないためのプロゾーン設定を作成することを目的とした。【方法】当該患者の反応過程を他の約 1700 件の反応過程と比較し、反応過程の異なる区間を使用し、プロゾーン判定の閾値を設定した。【結果】当該患者の反応過程は第 2 試薬添加後 22~25 ポイントの吸光度差 (A) が他検体と比較して小さく、第 2 試薬添加後 27~30 ポイントの吸光度差 (B) は同等であった。そこで、A を B で除した値が、当該患者では 0.68 と他検体よりも著しく小さくなるため、プロゾーン判定の閾値を 2.1 と設定した。以降当該患者検体はプロゾーン判定異常がつき、異常反応がリアルタイムに発見された。【考察】プロゾーン判定は測定濃度がプロゾーン域でなくても、異常反応検出に応用でき、日常検査でリアルタイムに異常反応を検出するのに有用であった。  
連絡先 0263-37-2800